

台湾大學側の発表（要旨）

身体部位詞の「手」に関する空間意識についての一考察

—「方向」の用法を中心に—

林 科成

現代日本語では、身体部位を指す「手」が多義的構造を持っている。いろいろな意味の中で、「右手には山が見えた」のように、「手」が「方向性」を含んでいる表現は少なくない。そのため、本稿の目的は、身体部位詞の「手」が「方向性」という意味へ如何に拡張したのか、すなわち、人間が「手」を理解するに際して、どのようなプロセスで身体部位と関係のないように見える「方向」の意味と結び付けさせるか、を明らかにすることである。

本稿で取り上げられた考察対象は13語である。具体的な分析の方法としては、認知言語学において、多義語の形成には欠かせない人間の重要な認知能力と認められる、メタファーとメトニミーとの概念を導入した。構成は三つの部分に分けられる。まずは「右手」と「左手」という、「身体性」の意味がまだ強く残っている言葉から分析を行ったことである。次に、「山の手」、「海手」といった自然界のモノを表す定着した表現について、辞書にのっている記述を考察しながら、その意味解釈の曖昧さを指摘した。最後、「行く手」などの抽象性がやや高い言葉を対象に考察した後、前の二種類の言葉と照らし合わせ、「方向」を表す「手」の諸用語が同一のプロセスによって派生されたか否かについて比較的に分析し結論を提案した。

りん かせい／台湾大學 日本語学科大学院3年